読売俳壇

矢島渚男 選

琵琶湖より一本にして夏の川　大津市　竹村　哲男

【評】湖面標高86㍍の琵琶湖から瀬田川、宇治川、木津川、桂川などと合流し、淀川と名前を変えて大阪湾まで75キロを流れ下る一本の川。簡明で、涼を呼ぶ秀句である。

泣き崩れ立てぬ球児の夏終る　日高市　田辺　英男

【評】「立てぬ」の描写が優れる。立ち上がり、厳しい練習で培った精神で立派な仕事をして下さい。

田の水を切つて見守る炎暑かな　山形県　沼沢さとみ

【評】水切りは出穂の前に一旦田の水を止めることだが、今年は地熱は充分だが各地で水不足になっている所もある。なんという夏だったことか。

垣根より風蘭の香の座敷かな　町田市　枝沢　聖文

水打つてひとごこちつく日暮かな　尼崎市　原　すずえ

青田風跡継ぎのなき過疎すすむ　行橋市　野田　文子

蛍の火見ずに終るか永らへて　神奈川県　新井たか志

夏草の人の丈なす忠魂碑　横浜市　我妻　幸男

禿頭に並べる髪を洗ひをり　大阪市　塚本　宣雄

老鶯や終のすみかの大江山　京都府　山田　国雄

高野ムツオ 選

七夕や生きて再び住めぬ町　大阪市　今井　文雄

【評】「住めぬ町」から福島の原発事故で避難を余儀なくされた人々が想起できる。天上では一年に一度の逢瀬が許される七夕ゆえに、その悲しみは一層心に沁みる。

青梅の選り分けられて捨てらるる　神奈川県　石原美枝子

【評】梅干しなど用途別に選別している。不要となった青梅に着眼したことで成熟叶わなかった梅の実そのものへの哀れが湛えられた。

夏痩せのズボンに重きスマホかな　磐田市　佐次本　守

【評】緩くなった麻のズボンの片っ方に無理矢理突っ込んだスマホのなんと重いこと。歩くたびにズボンがずり落ちる。実感がこもるなあ。

帰省子やまづは畳に寝転びぬ　長野県　村田　実

虹の橋渡りたき日は膝に猫　茨木市　木川　志佳

河童忌や雨降りしきる巣鴨駅　東京都　腰山　正久

薔薇眺めぬし眼を海へうつしけり　香川県　福家　市子

百日紅奥に戦争慰霊の碑　船橋市　中島　紺

雲の上雲積み上げて海開き　北本市　萩原　行博

軽トラで巡る神輿を畔に待つ　松江市　三方　元

正木ゆう子 選

子狐の目玉ももゆる夜振かな　津市　中山　道春

【評】夜振は、夏の夜、火や灯火に寄って来る魚を捕る川漁。舟上の火を、陸から子狐が見詰めている。目に映る炎が燃える。「もゆる」が子狐の命を思わせ、絵本の一頁のよう。

遠回りするか草虱をゆくか　八王子市　徳永　松雄

【評】「遠回り」と「草虱」の、大きさ的にアンバランスな対比表現が面白い。しかも「草虱をゆく」の「を」の働きによる省略の妙も見所。

立ち泳ぎしてゆくごとく涼しさを　大野城市　野分　のわ

【評】立ち泳ぎするような涼しさ、という意味ではないだろう。涼しさの中を立ち泳ぎするようにゆく、だろうか。「く」「を」の使い方が独特。

蚊帳吊草教へて蚊帳を説明す　東京都　伊藤　博之

初秋や海を眺めに登る山　福島市　引地こうじ

老人の耳鳴りを消す蟬時雨　鎌倉市　樋口　信代

指先に蟻を這はせて授業中　東京都　望月　清彦

片陰の一筆書を試みぬ　川崎市　多田　敬

花見たきゆゑに求めしオクラ食む　東京都　松永　京子

白鼻芯涼しき貌をしてゐたる　宇陀市　泉尾　武則

小澤實 選

蛍狩疎開乙女を待ちし土手　下関市　粟屋　邦夫

【評】都会から疎開して来た乙女を土手の上で待って、二人で蛍を採りに行ったというのだ。闇雲に待っていたのではなく約束していたろう。この恋は果たしてどうなったか。

焼跡の父に赤紙終戦日　富山市　泉　貞夫

【評】空襲で自宅が焼け、その焼跡を片付けていた父に召集令状が届いた、そんなことを終戦日に思い出した。父は無事に帰宅できたのか。

母となり母はくちなはぶんまはす　長岡京市　みつきみすず

【評】くちなはは蛇のこと。子を生んで母となって、さらにたくましくなる。庭に入って来た蛇を素手で捕えて、振り回しているというのだ。

青葉木菟鳴けど鳴けども秘湯まだ　川崎市　沼田　広美

稲妻が真夜の空母を照らし出す　名古屋市　可知　豊親

龍馬への手紙を書こう夏の夕　越谷市　安居院半樹

箸置きはマイセン白磁ヨットの絵　東京都　山口　照男

炎ゆる日の火山灰まみれなり港町　鹿児島市　鶴屋　洋子

バイクで去るお勤め終えし盆僧は　横浜市　池末　亮輔

夏は夜堅焼蕎麦は餡掛けで　武蔵野市　相坂　康

枝しおり折

三谷弘子歌集『はじまりの音』

鋭い観察眼とおっとりとした表現のバランスがユニーク。〈街灯のあかりに雪のしんしんと紡いで夜はいま織りあがる〉

（青磁社、2750円）

大川匡子歌集『ニューロンネット』

夢と現実のあわいにたゆたう感覚を捉えた。〈病床にカーテン長く裾を引く不思議な小人夜ごと現る〉

（六花書林、2750円）

新井敦子歌集『遍照の空』　父母への慕情が波のように寄せては引く。〈亡き母の子宮のなかで眼をさましこれから生まれる夢をみていた〉

（短歌研究社、2750円）

塚田千束歌集『星夜航路』　諦念をみずみずしく反転させる感性が光る。〈落ちるという存在理由抱きながら滝はみずから身を投げつづけ〉

（短歌研究社、2420円）

◆第61回短歌研究賞＝俵万智「白き父」（20首）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭